

整理作業の風景

編みかごは脆いので、壊れないように、毛先の細い面相筆で少しずつ土を取り除いていきます。



記録の方法

記録として、実測図を作成し、写真を撮影します。実測図では正確な寸法や特徴を把握でき、写真は編みかごの雰囲気をよく伝えてくれます。

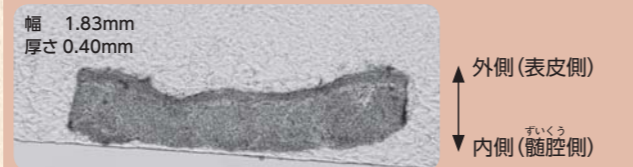
今回、手で測る実測は困難であったため、機械を使用して実測図を作成する三次元計測を実施しました。正確かつ迅速に記録できるとともに、将来、このデータをもとにレプリカをつくることもできます。

植物学と顕微鏡

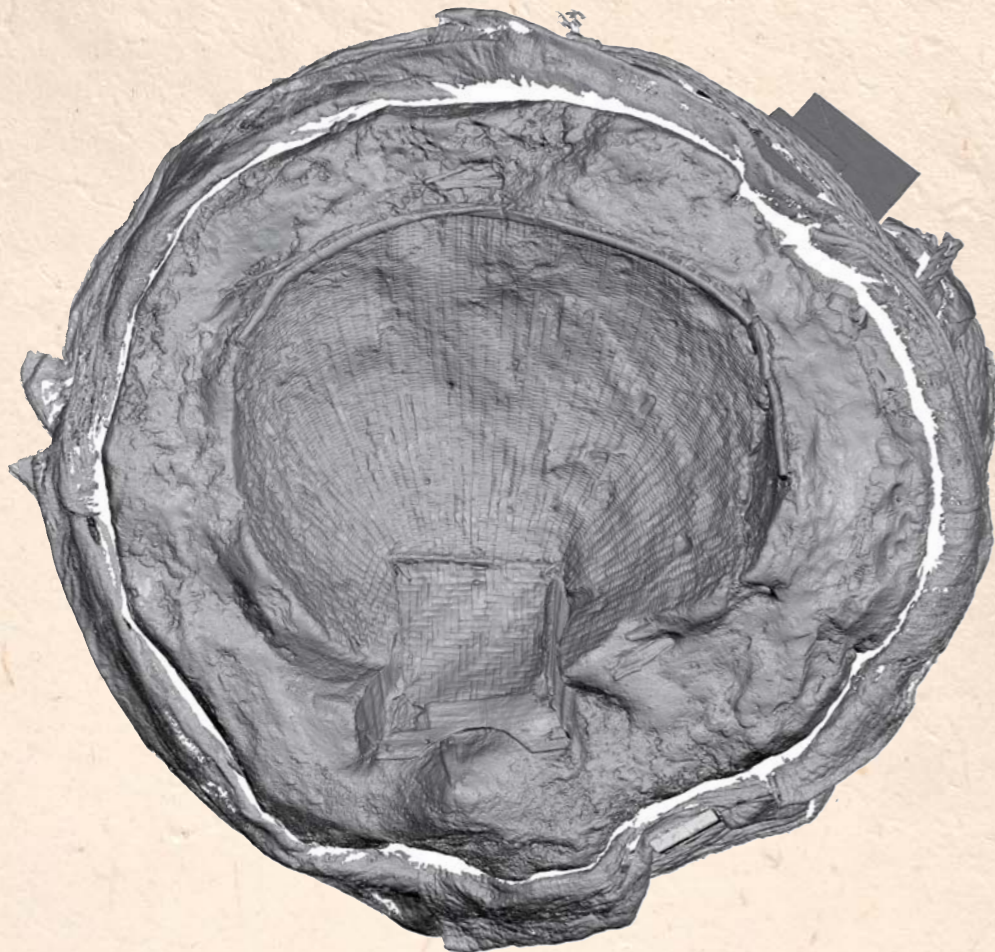
編みかごの調査を進めるうえで、植物学の知識と調査が欠かせません。今回、専門家を招いて、植物種類の同定やかご素材の調整手法などについて共同で調査しました。顕微鏡で覗いた先には、果てしないミクロな世界が広がっていたのです。



【太い素材】内側を削ぎ落とす。 1mm



【細い素材】内側を削ぎ落とし、両縁も削ぐ。
かご素材(割り裂いた稗)の調整手法 ※画像提供:小林和真、鈴木三男、能城修一



脚付き編みかごの三次元計測データ 1:4

まわりに

瀬田遺跡の脚付き編みかごは、実に多くのことを教えてくれました。

「四方転びの箱」が付いているとわかった瞬間に沸いた、研究員の歓喜の声は今なお耳に残っています。また、かご素材のつくり方や植物の種類が解明されたことも大きな成果です。脚付き編みかごに多くを語らせるべく、今後も検討を進めていきます。

全国初!!

弥生時代の脚付き編みかご

瀬田遺跡(飛鳥藤原第187次調査)の成果

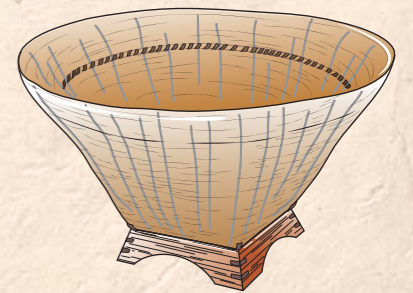
はじめに

瀬田遺跡は、奈良県橿原市城殿町に位置する、縄文時代から平安時代の複合遺跡です。2015年11月から2016年10月まで、ポリテクセンター奈良の本館建て替えにともない、発掘調査をしました。多くの成果が得られたなかでも、弥生時代後期末(2世紀後半)の陸橋をもつ円形周溝墓の発見は、前方後円墳の成立過程を考える上で重要であり、多くの関心呼びました。

貴重な編みかご

この円形周溝墓の周溝から、編みかごが1点出土しました。また、同じ時代の土坑から3点の編みかごが見つかりました。遺存状態が比較的良好なことにくわえて、一緒に出土した土器によって弥生時代後期末から終末期(3世紀前半)のものと時期を特定できたことも幸運でした。

さらに、周溝出土の編みかごには、底部に脚が付いていたのです。その脚は「四方転びの箱」と呼ばれるもので、これまで用途が不明だった木製品です。今回の発見で、はじめて謎の木製品「四方転びの箱」の用途が判明したことは、きわめて大きな成果です。



脚付き編みかごの復原イメージ



出土状況

瀬田遺跡から香具山を望む(西から)

いにしえのわざとちえ



かごの形を支える親骨

上端に巻かれている枝は、親骨と呼ばれる補強材です。かごの形を維持するためのものです。かご本体に粗く巻き付けている様子や合わせ目が観察できます。



親骨の合わせ目



親骨と巻き付け材

脚は「四方転びの箱」

「四方転びの箱」は、四面の側板が傾斜して立ち上がる箱状品です。側板の四隅を紐で留めて組み上げていますが、底板と蓋板はありません。これまでに約50例が出土していますが、何に使うものなのか、用途は不明でした。今回、かごの脚としての用途がはじめてわかりました。多くの「四方転びの箱」は、上辺(短辺)が8~12cmです。今回出土した編みかごの底部が一辺6~12cmであり、大きさもほぼ一致します。



【参考】平城宮跡下層の「四方転びの箱」



脚の留め紐



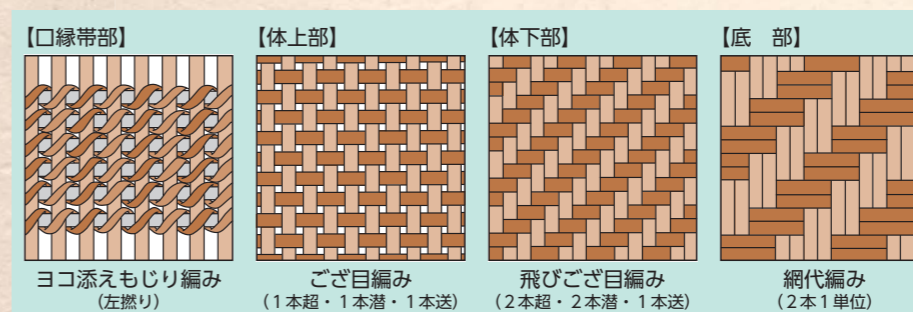
かごと脚の結束

植物の種類を選択

素材に利用する植物の種類を、植物の特性に応じて、適材適所を選択しています。たとえば、タテ材とヨコ材はタケ亜科の稈、親骨がヒサカキの枝、親骨の巻き付け材と脚の留め紐はツツラフジの蔓です。紐などには柔らかい植物の部位を選んでいるのです。

素材の大きさと編み方を調整

かごの素材は、タテ材が太く、ヨコ材は細くなっています。さらに、上半部のヨコ材は薄く、下半分は分厚くなっています。素材の幅や厚さをたくみに調整しながら、かごをつくっているのです。また、部位によって編み方を変える工夫もみられます。



編み方の模式図

※鳥取県埋文セ2005掲載図をもとに作成

ヨコ添えもじり編み

ござ目編み

飛びござ目編み

網代編み

※原寸大
(中央部)